

第 1 章 実験結果

1.1 計算結果が平衡状態であるか

各実験での全球平均外向き赤外放射 (OLR) と全球平均入射短波放射 (OSR) の全球平均の時系列図を図 ?? に示す。この図を見ると、S1366 から S1800 の太陽定数では、おおよそ 10 年以上積分をすることで、全球平均 OLR と OSR がほぼ一致して、大気の状態が平衡になっていることがわかる。一方で、S2000 では、全球平均 OLR が激しく変動していて、この図からは平衡状態に達しているかは判断できない。Ishiwatari *et al.* (2002) では、灰色大気での放射上限は 1600 W/m^2 であると結論したが、本研究で得られた結果では、 $S = 1800 \text{ W/m}^2$ でも平衡状態に達しているように見える。これは、Ishiwatari *et al.* (2002) のモデルでは雲がなかったのに対して、本研究では雲があるモデルで計算をしているため、雲によって短波放射が地表面に全ては到達しないからであると考えられる。

次に、各実験での OLR の東西平均を図 1.2 に、地表面温度の東西平均を図 1.3 に示す。この図を見ると、灰色大気・雲なしのモデルで Ishiwatari *et al.* (2002) が結論したように、非灰色大気・雲ありのモデルでも、太陽定数が増大したときに、OLR の南北分布が一様になることが見て取れる。

各実験で得られた子午面構造を図 1.4 から 1.8 に示す。いずれの実験でも、東西風の子午面分布を確認すると、ジェットが発生しているのがわかる。しかし、S1800 と S2000 ではジェットが大気上端にくっついており、モデルの高度が足りていない可能性がある。

1.2 南北熱輸送の太陽定数依存性

南北熱輸送に関して考察する。南北熱輸送は、潜熱によるもの F_L と、乾燥静的エネルギー F_D によるものに分類できる。そして、 F_L と F_D の和が全熱輸送量 F_T になる。乾燥静的エネルギーはエンタルピーとジオポテンシャルの和であるから、それぞれ式で表せば以下ようになる。

$$F_L = \int_{p_s}^0 Lq v dp = \int_1^0 Lq v p_s d\sigma, \quad (1.1)$$

$$F_D = \int_{p_s}^0 (c_{pn}T + gh)v dp = \int_1^0 (c_{pn}T + gh)v p_s d\sigma, \quad (1.2)$$

$$F_T = F_L + F_D. \quad (1.3)$$

図 1.9 に東西平均・時間平均をした各実験での南北熱輸送量を示した。図を見ると、乾燥静的エネルギーの南北輸送は S1500 で最大になり、それより太陽定数を大きくすると乾燥静的エネルギー

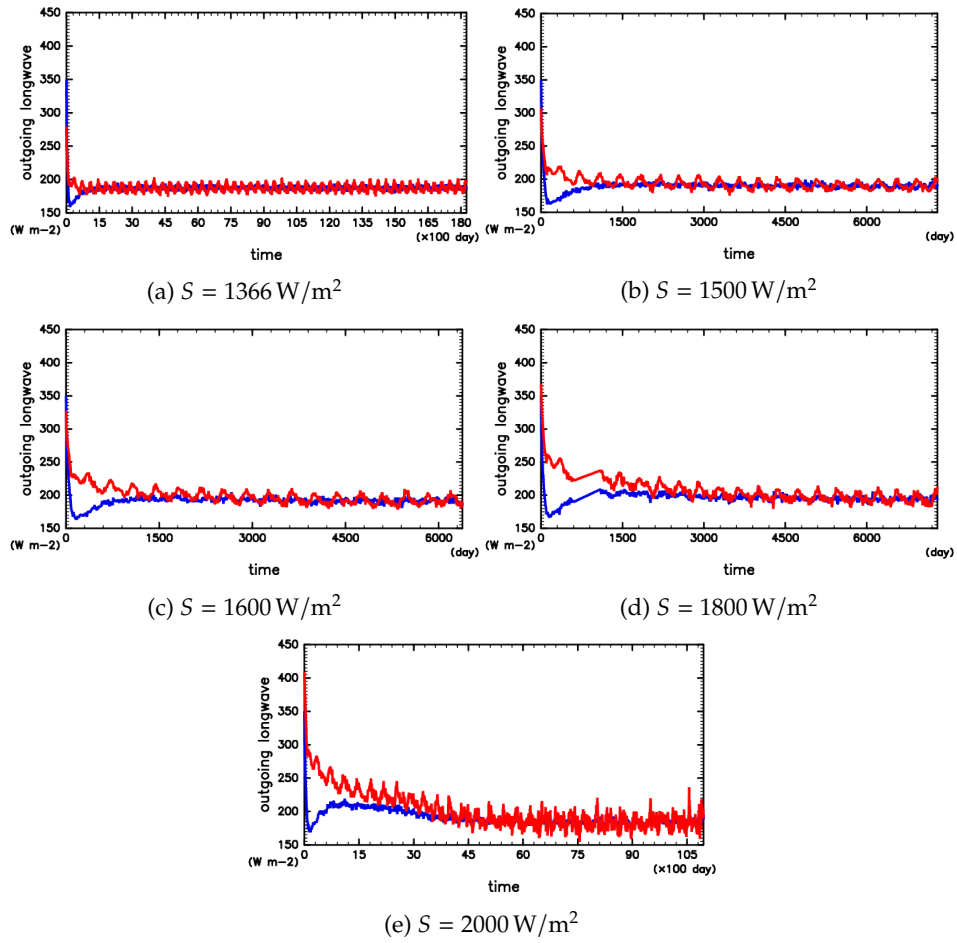


図 1.1: 各実験での全球平均した OLR (赤線) と OSR (青線) の時系列変化

の南北輸送は減少してゆくのわかる。一方で、潜熱輸送に関しては、 S_{1800} までは太陽定数が大きくなるに従って、潜熱の南北輸送量は増大していくことが見て取れる。しかし、 S_{2000} では潜熱の輸送量が小さくなっている。そして、全熱輸送量は、 S_{1800} までは太陽定数が大きくなるにつれて増大しているが、 S_{2000} では小さくなっている。

ところで、 $\bar{\bullet}$ で時間平均、 $[\bullet]$ で東西平均、平均からのずれを $\bullet' = \bullet - \bar{\bullet}$, $\bullet^* = \bullet - [\bullet]$ 、と表すこと

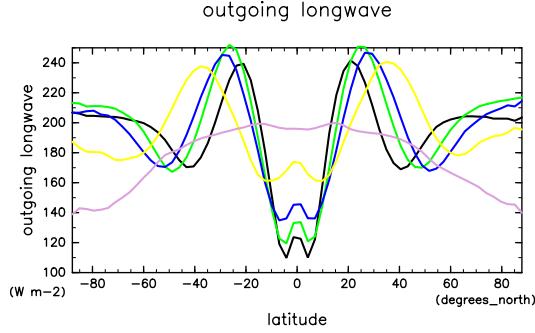


図 1.2: 各実験での OLR の東西平均。それぞれ、黒線: S1366; 緑線: S1500; 青線: S1600; 黄線: S1800; 桃線: S2000 の結果である。

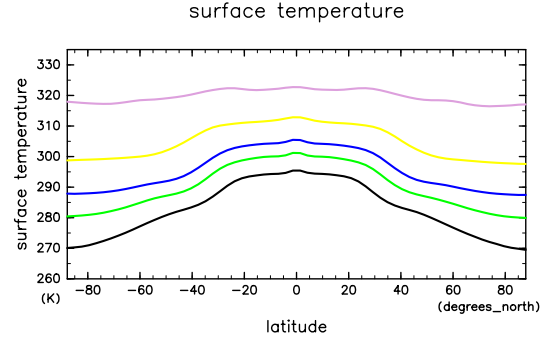


図 1.3: 各実験での地表面温度の東西平均。それぞれ、黒線: S1366; 緑線: S1500; 青線: S1600; 黄線: S1800; 桃線: S2000 の結果である。

にすると、2つの量 x, v の積を時間平均・東西平均した値は、

$$\begin{aligned}
 [\overline{xv}] &= \overline{(\bar{x} - x')(\bar{v} - v')} \\
 &= \overline{\bar{x}\bar{v} + \bar{x}'\bar{v}' + \bar{x}\bar{v}' + \bar{x}'\bar{v}'} \\
 &= [\bar{x}\bar{v}] + [\bar{x}'\bar{v}] + [\bar{x}\bar{v}'] + [\bar{x}'\bar{v}'] \\
 &= [\bar{x}\bar{v}] + [\bar{x}'\bar{v}'] \\
 &= \overline{([\bar{x}] + \bar{x}^*)([\bar{v}] + \bar{v}^*)} + [\bar{x}'\bar{v}'] \\
 &= [([\bar{x}] + \bar{x}^*)([\bar{v}] + \bar{v}^*)] + [\bar{x}'\bar{v}'] \\
 &= [[\bar{x}][\bar{v}]] + [\bar{x}^*[\bar{v}]] + [[\bar{x}]\bar{v}^*] + [\bar{x}^*\bar{v}^*] + [\bar{x}'\bar{v}'] \\
 &= [\bar{x}][\bar{v}] + [\bar{x}^*\bar{v}^*] + [\bar{x}'\bar{v}'] \tag{1.4}
 \end{aligned}$$

のように変形をすることができる。(1.4)において、 $x = Lq$ とすると、潜熱の南北熱輸送を表す式になり、 $x = c_{pn}T + gh$ とすれば、乾燥静的エネルギーの南北輸送を表す式になるので、南北熱輸送は $[\bar{x}][\bar{v}]$ で表される項、 $[\bar{x}^*\bar{v}^*]$ で表される項、 $[\bar{x}'\bar{v}']$ で表される項の3つの和になっていることがわかる。 $[\bar{x}][\bar{v}]$ は平均子午面循環による輸送に対応する。 $[\bar{x}^*\bar{v}^*]$ で表される項は、停滞性擾乱による輸送、例えば山岳派による輸送を表している。 $[\bar{x}'\bar{v}']$ で表される項は、移動性擾乱による輸送、例えば低気圧による輸送を表している。図 1.10 と図 1.11 に、それぞれの熱輸送の内訳を示した。

図 1.9 を詳しく見ると、潜熱輸送は低緯度と高緯度にピークを持っており、乾燥静的エネルギー輸送は中緯度にピークを持っている。潜熱輸送の低緯度のピークに対応する部分では、大気下層で低緯度向きの平均南北風が卓越している。そして、比湿は低緯度で大きく、大気下層で大きくなっている。

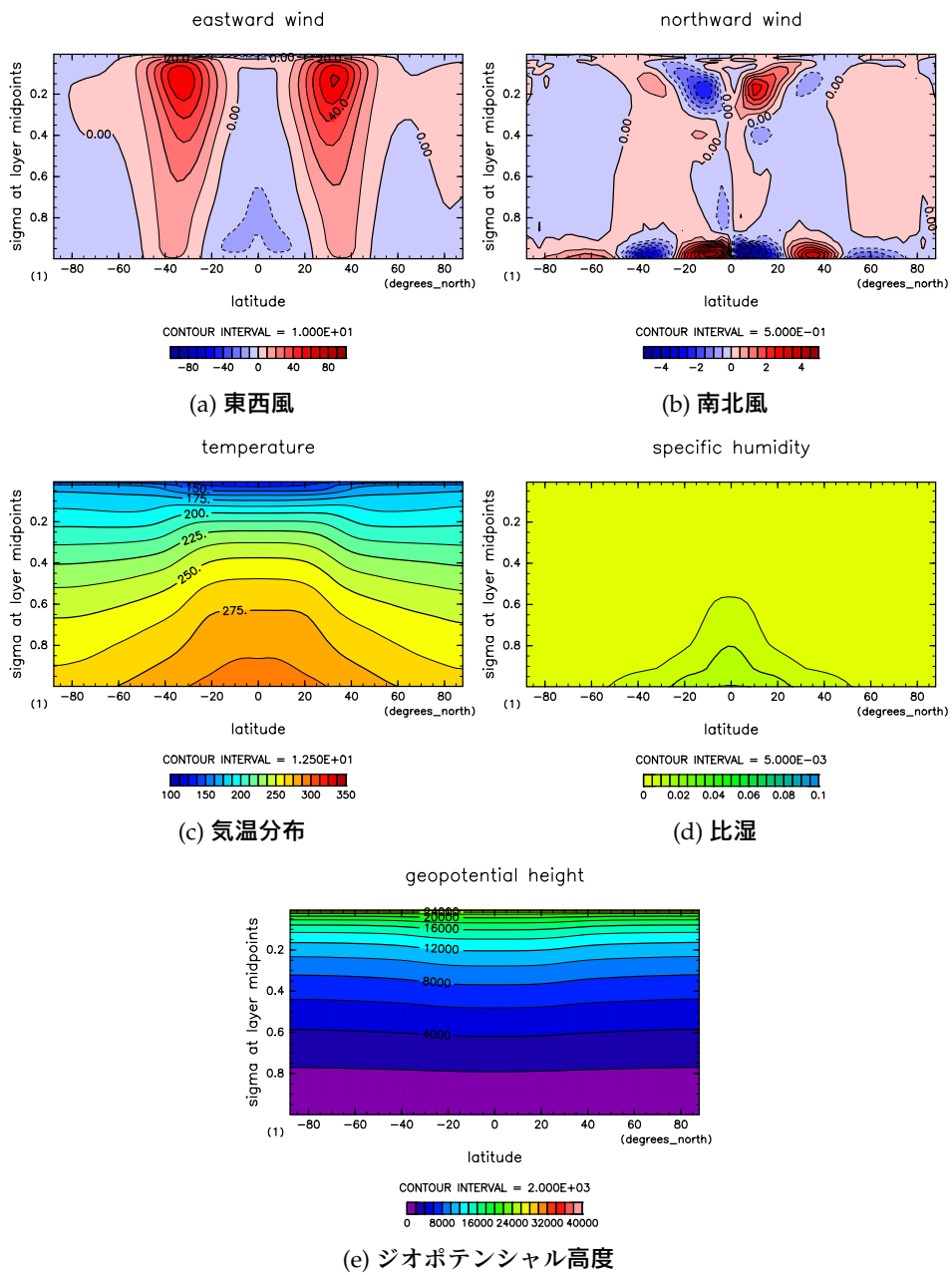


図 1.4: $S = 1366 \text{ W/m}^2$ の結果。11 年目の年平均値。

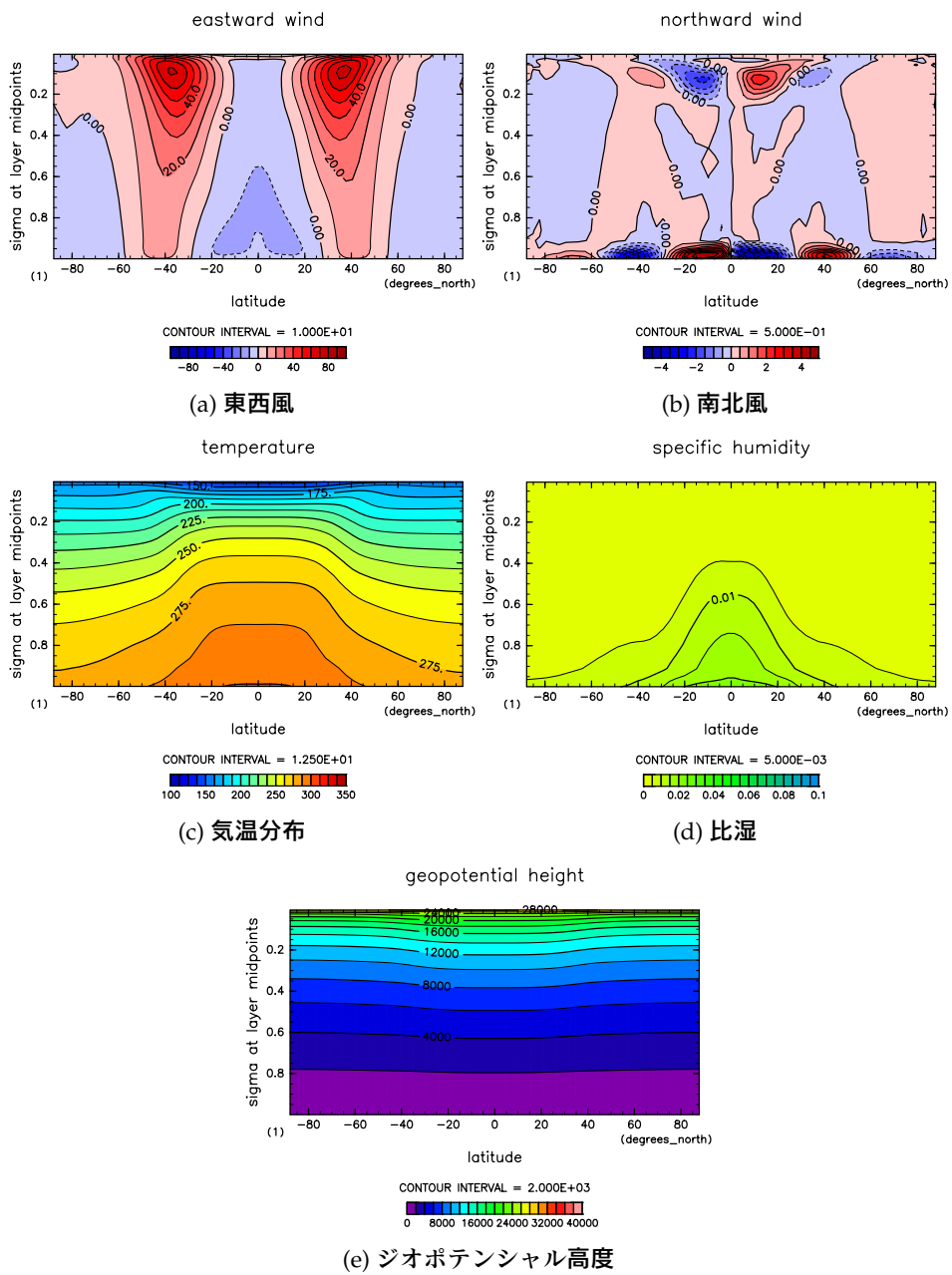


図 1.5: $S = 1500 \text{ W/m}^2$ の結果。11 年目の年平均値。

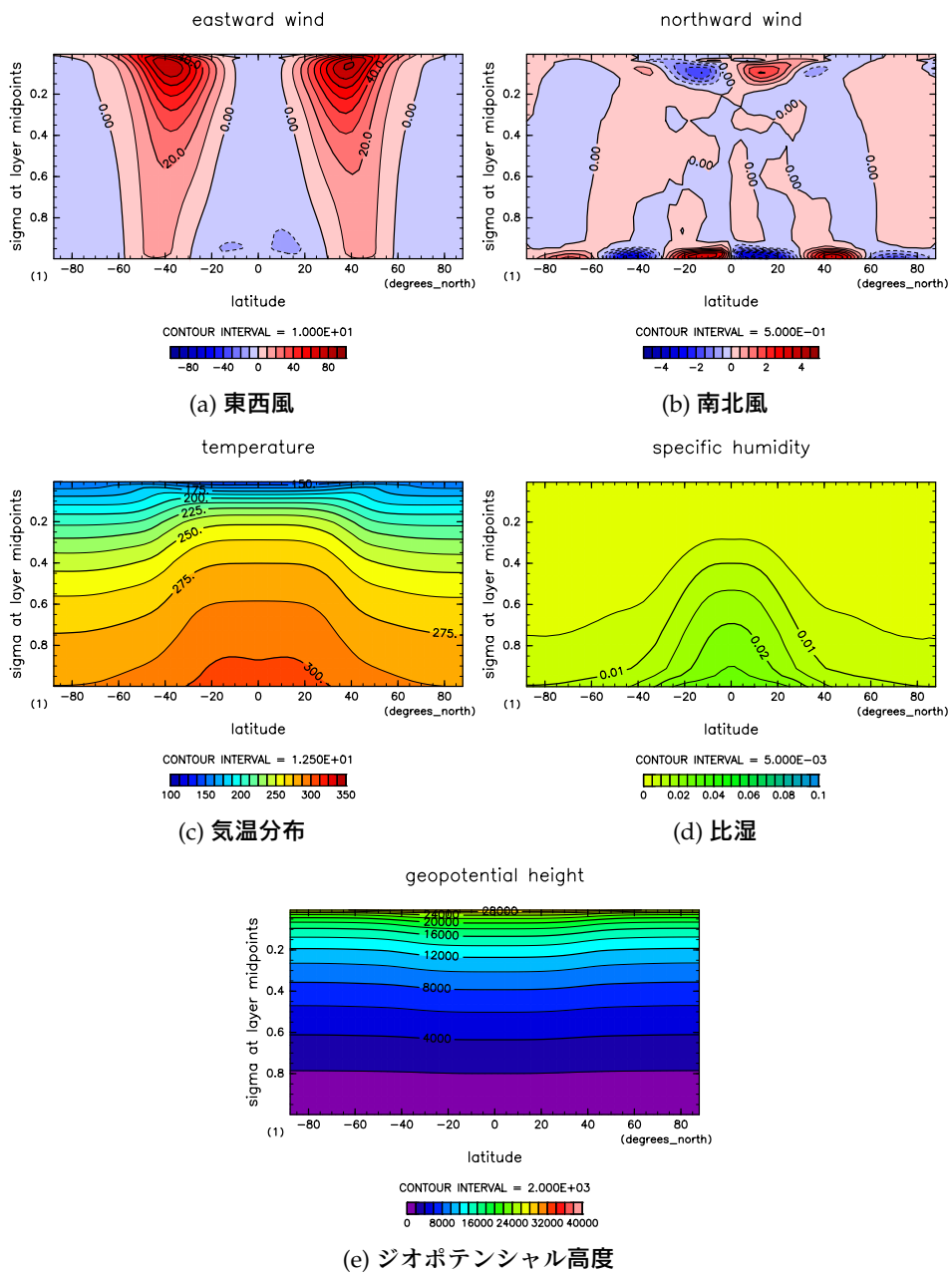


図 1.6: $S = 1600 \text{ W/m}^2$ の結果。11 年目の年平均値。

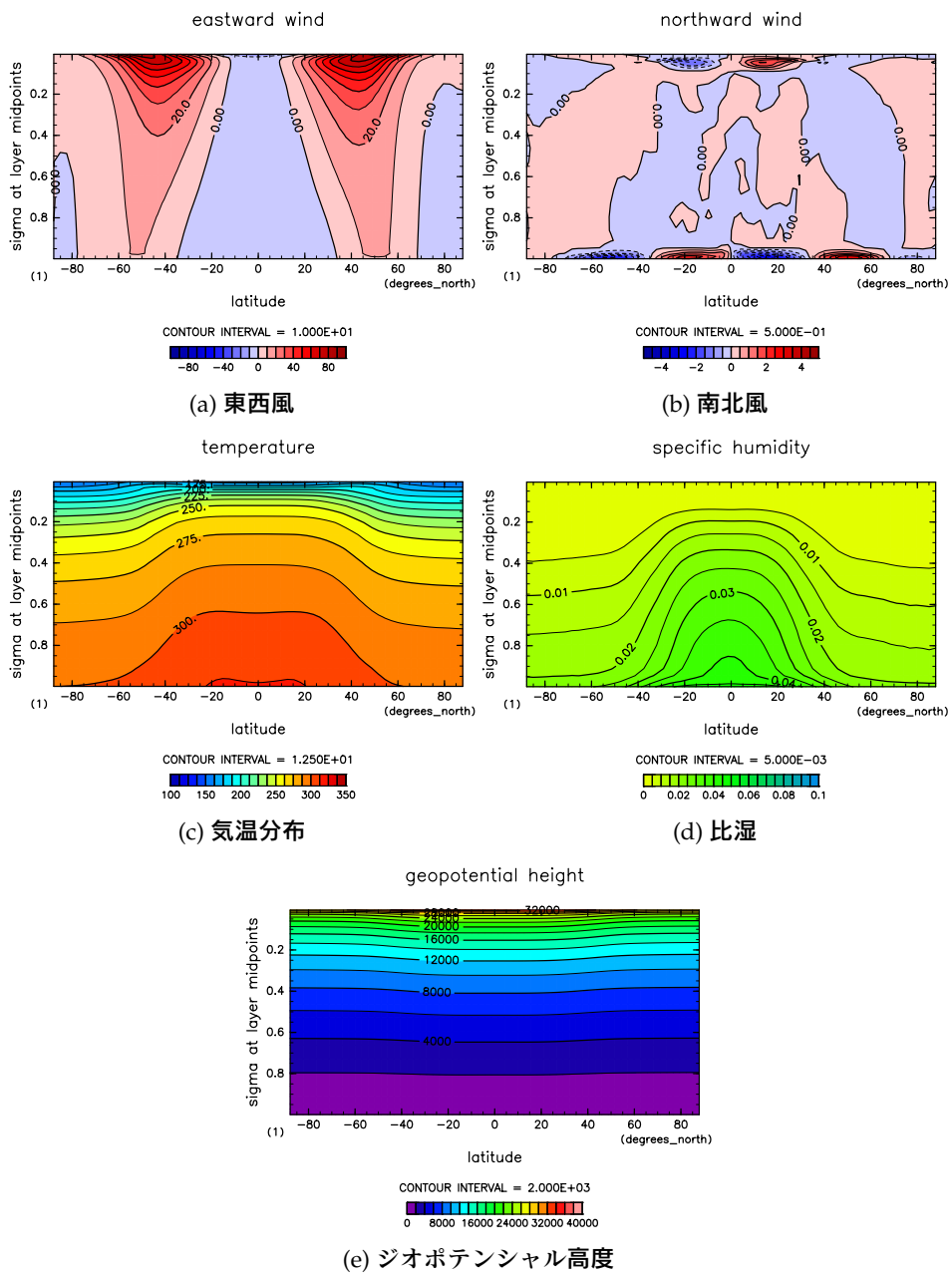


図 1.7: $S = 1800 \text{ W/m}^2$ の結果。11 年目の年平均値。

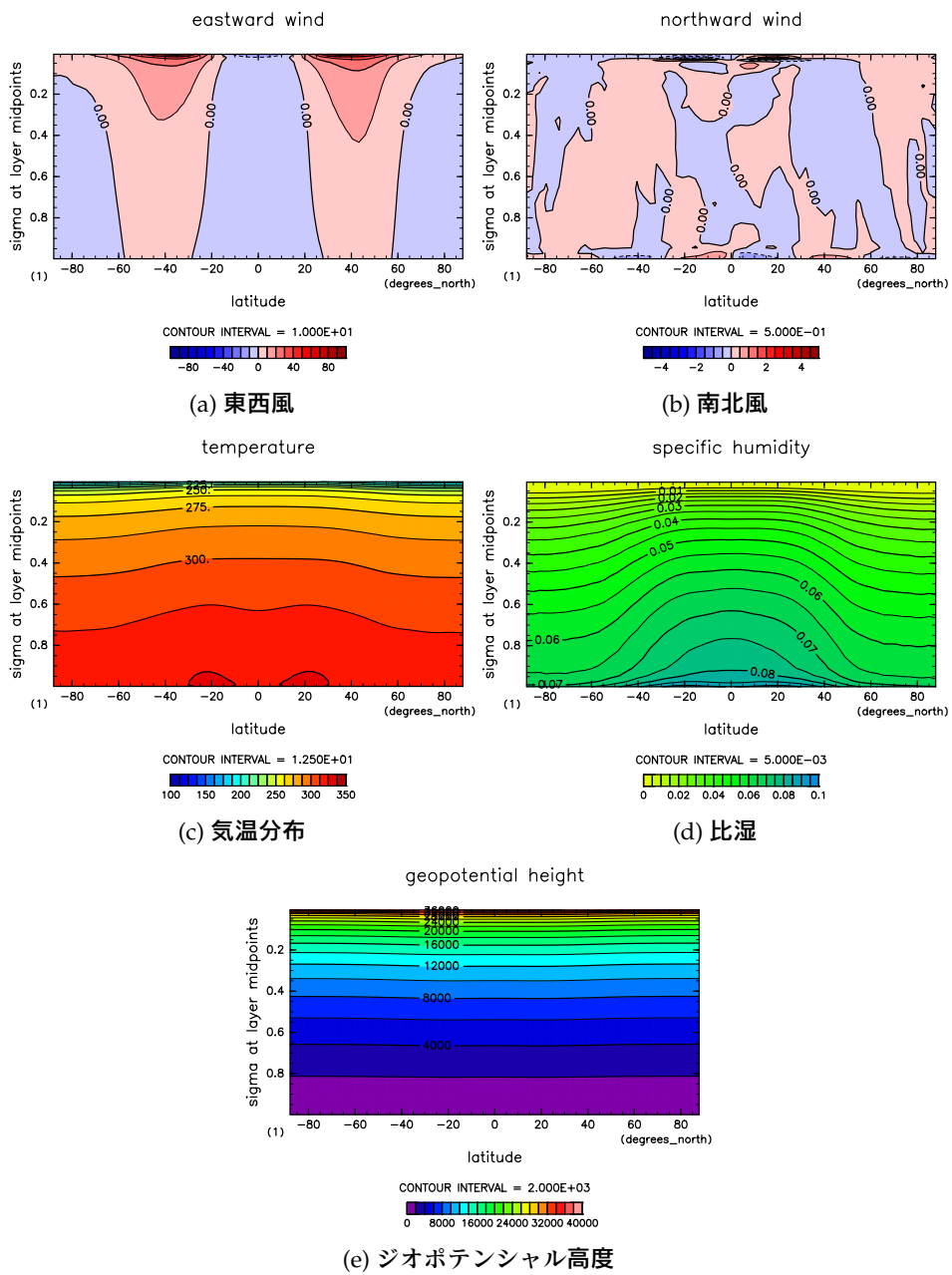


図 1.8: $S = 2000 \text{ W/m}^2$ の結果。31 年目の年平均値。

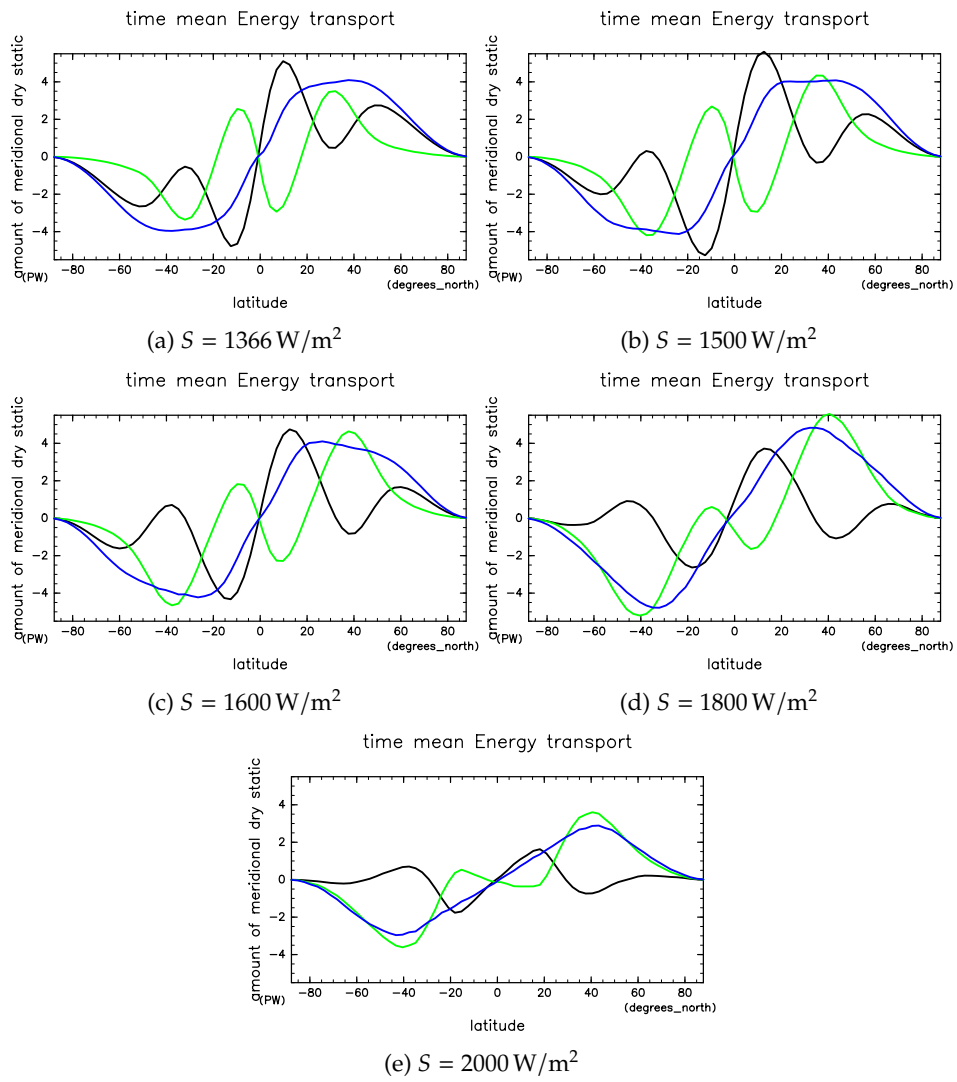


図 1.9: 各実験での時間平均・東西平均された南北熱輸送量。緑線が潜熱輸送、黒線が乾燥静的エネルギーの輸送、青線が全熱輸送量。

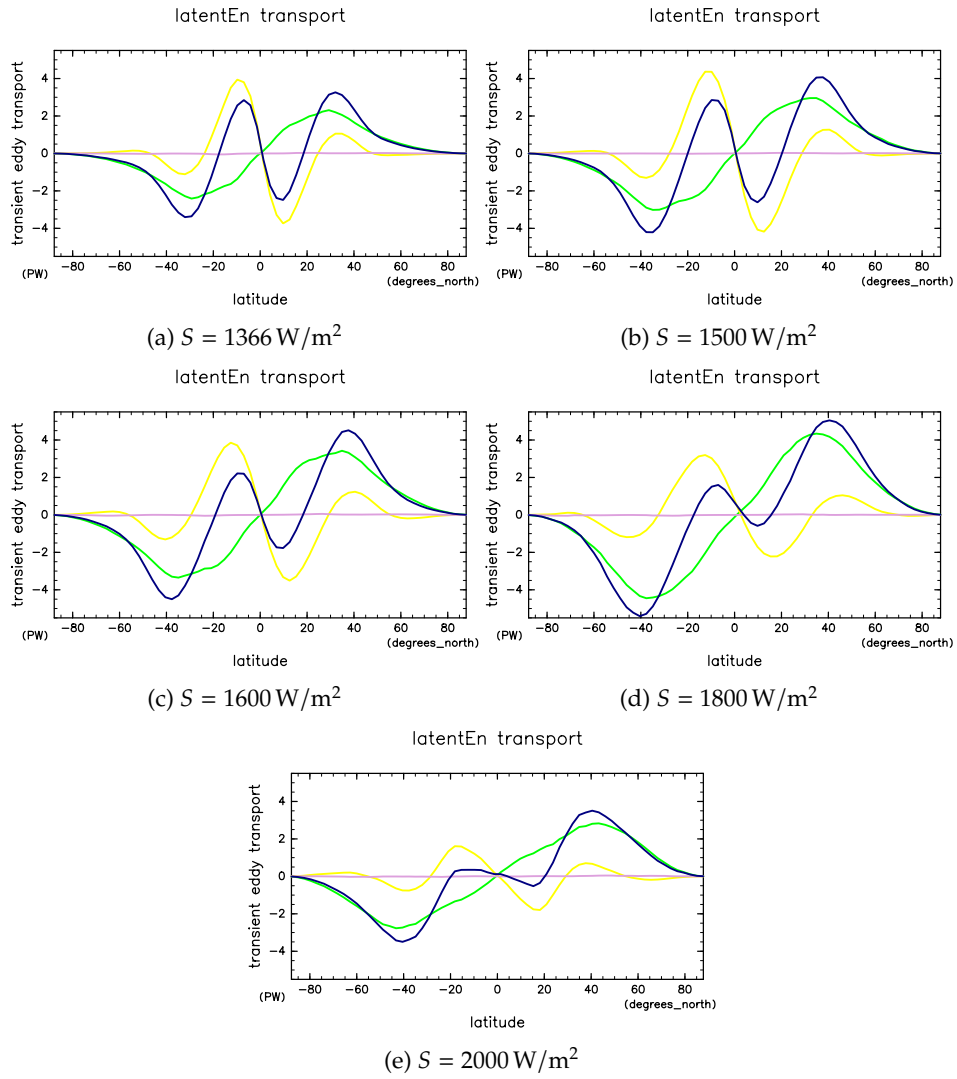


図 1.10: 各実験での潜熱輸送。青線が全輸送量、黄線が平均子午面循環による輸送量、桃線が停滞性擾乱による輸送量、緑線が移動性擾乱による輸送量。

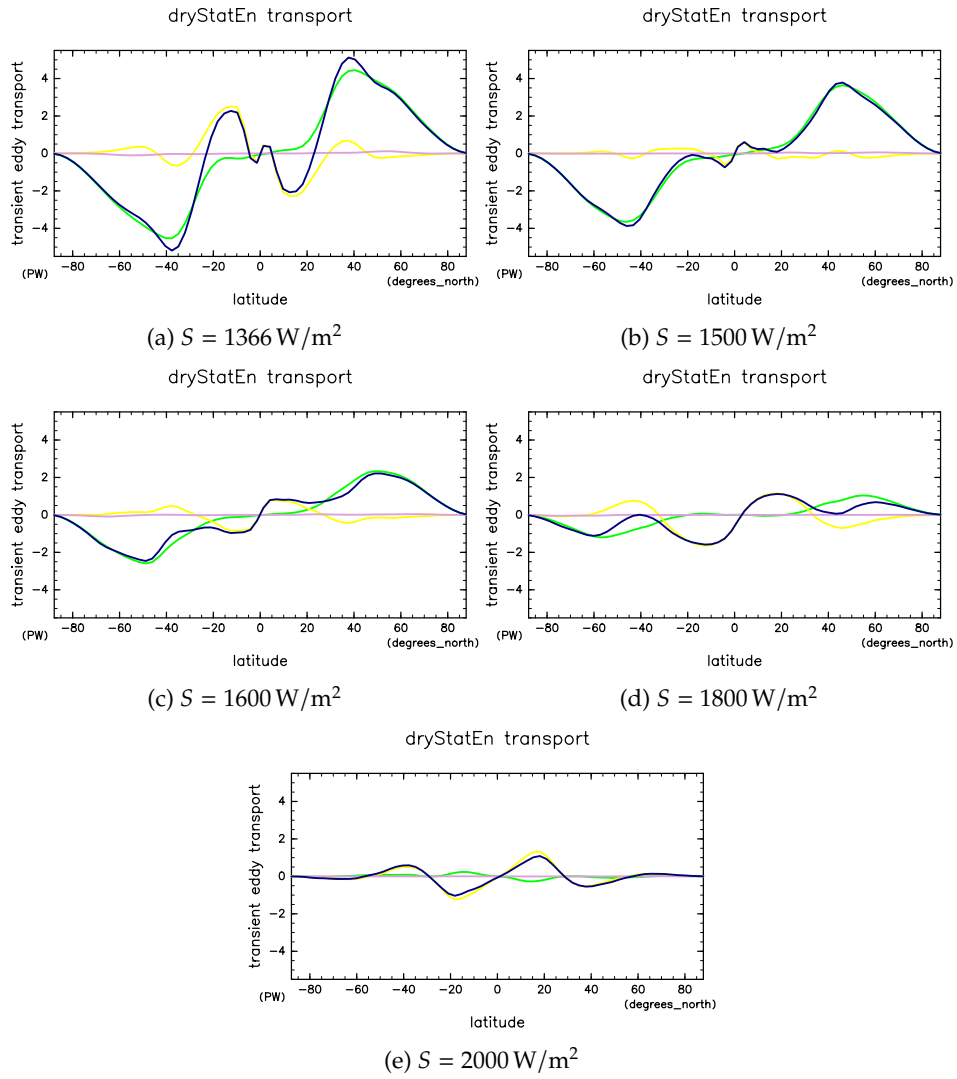


図 1.11: 各実験での乾燥静的エネルギー輸送。青線が全輸送量、黄線が平均子午面循環による輸送量、桃線が停滞性擾乱による輸送量、緑線が移動性擾乱による輸送量。